

放流効果について

1 ヒラメ



(経緯)・平成4年度より放流を開始、平成12年度より第4次計画に位置付けて大量放流を実施。

(効果)・漁獲量は6トン程度で推移していたが、R1年より増加し近年は20～25トン程度の漁獲がある。

・混入率は令和3年時点で5.6%

※混入率とは漁獲魚に占める放流魚の割合

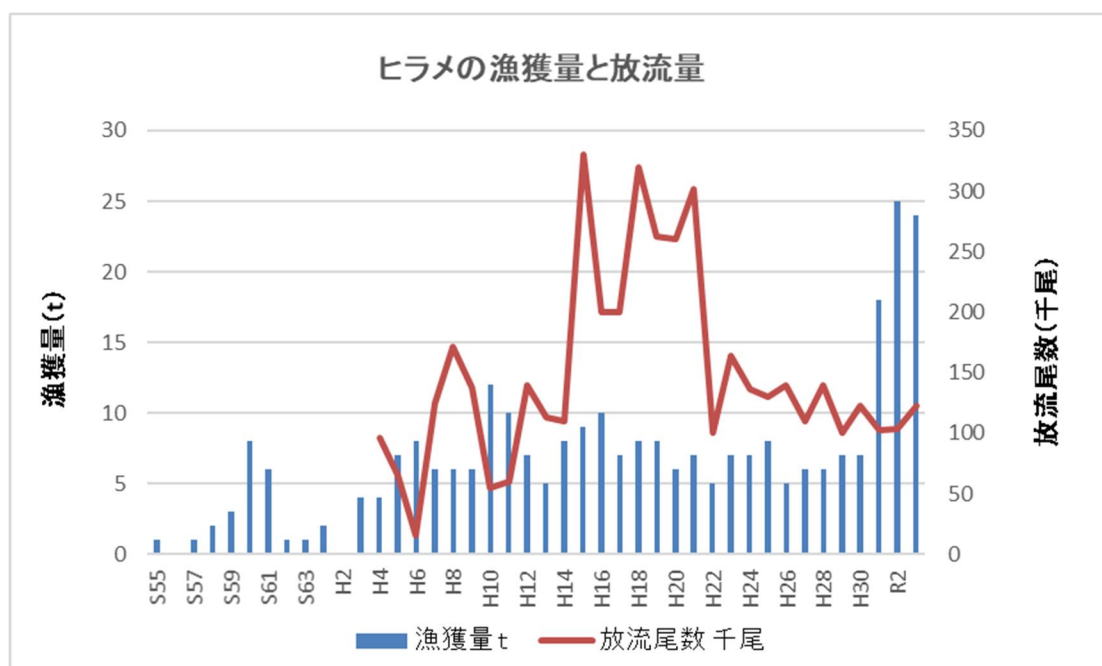


図1 ヒラメの漁獲量（統計値）と放流量の推移

2 キジハタ



- (経緯)・平成12年度より第4次計画の技術開発魚種に位置づけ、種苗生産と放流の検証をスタート。
- ・平成22年度より第6次計画の放流魚種に位置づけ、年間10万尾程度の放流を、以降継続して実施。
- (効果)・漁獲量は昭和63年には10トン程度漁獲されていたが、平成に入りほとんど漁獲がなくなった。
- ・放流の開始以降、漁獲量は徐々に増え始め、近年は2～4トン程度で推移。
 - ・混入率は令和3年時点で68.1%
- ※混入率とは漁獲魚に占める放流魚の割合

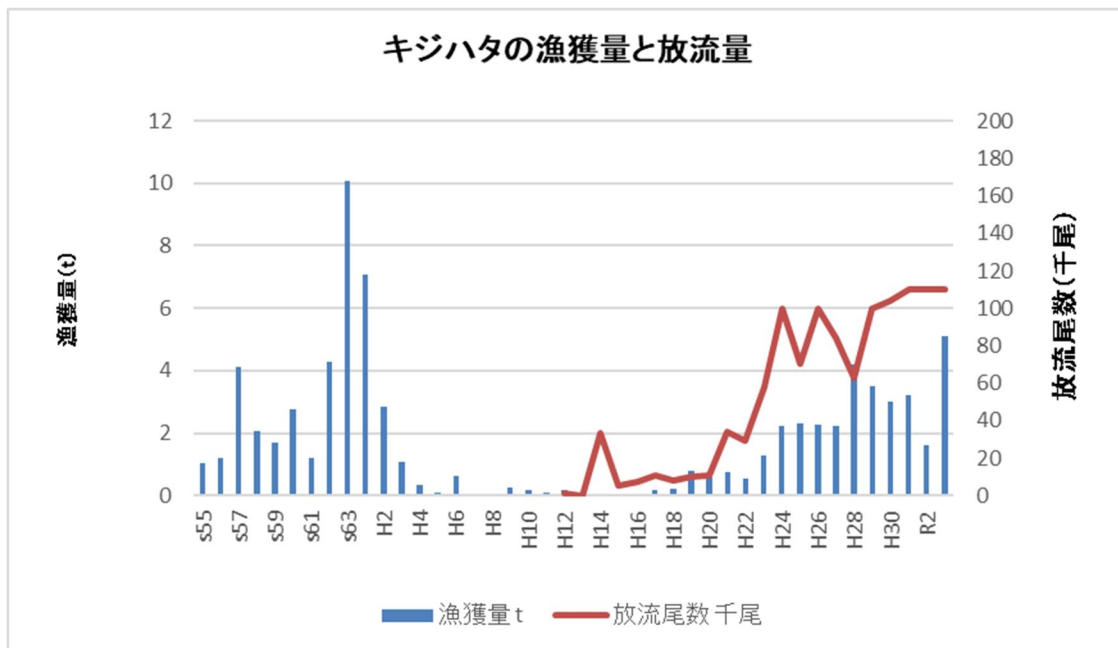


図2 キジハタの漁獲量（推定値）と放流量の推移

3 アカガイ



(経緯)・平成4～6年にかけて第2次および第3次計画に基づき、最大4万個放流。以降中止。

- ・平成27年より、第7次計画の放流魚種に位置づけ放流を再開。5～10万個程度の放流を実施。

- ・令和4年度の第8次計画からは、5万個での放流を継続。

- ・これまでは水産技術センターの調査船により放流を実施していたが、令和5年度からは漁業者自身により放流を実施予定（底びき部会と調整中）。

(効果)・過去より漁獲量の変動は大きいものの、放流の開始以降は15～30トン程度で高い漁獲が続いている。

- ・令和3年の混入率は、泉佐野漁協で1.3%、尾崎漁協で26.8%

※混入率とは漁獲魚に占める放流魚の割合

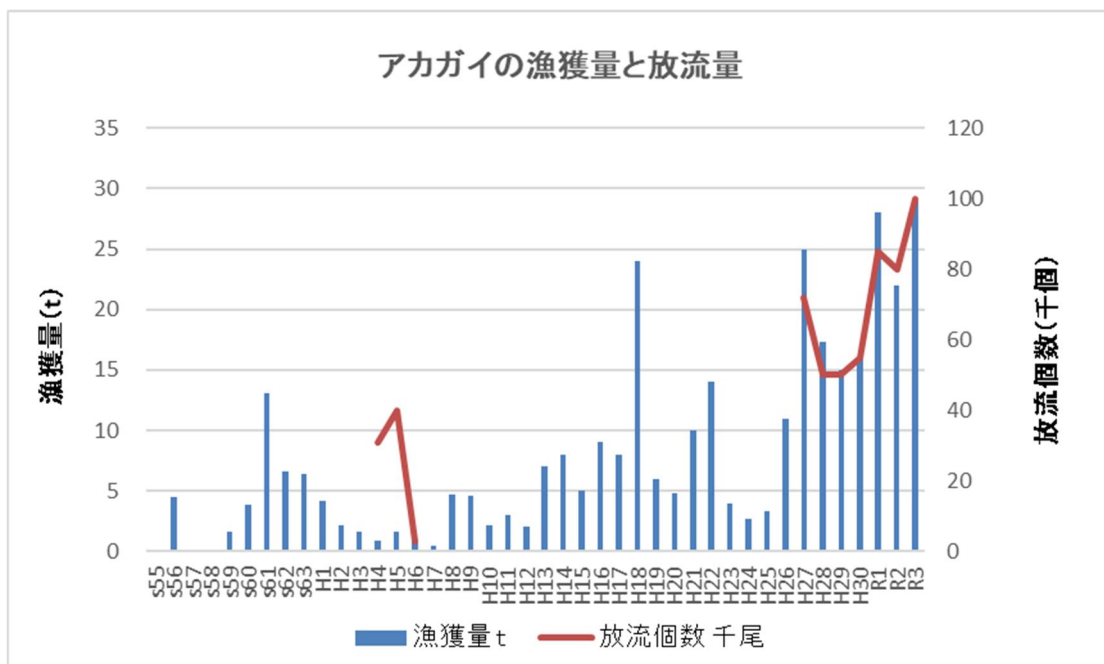


図3 アカガイの漁獲量（推定値）と放流量の推移

4 トラフグ



- (経緯)・平成27年度の第7次計画より、技術開発魚種に位置づけ、年間1～3万尾程度の放流を実施。中間育成技術や放流適地の検証等を行ってきた。
- ・令和4年度からの第8次計画からは、放流魚種にも位置づけ、年間5万尾を目標として放流を実施していく予定。資源造成への効果を見極めていく。
- (効果)・大阪での漁獲量は年間200キロ程度と推定。これまでは技術開発段階であり、放流数が多くないことから、資源造成の効果は表れていない。
- ・再捕獲の状況としては、7月頃に放流した個体が、11月頃から20センチ程度の当歳魚として漁獲され始める。1歳魚以上の再捕獲はこれまで少なかったが、昨年より1歳魚(700～800g)、2歳魚(1.2kg)が漁獲されるようになっていく。
 - ・令和4年度では月1～2回の標本漁協での市場調査を中心に13個体が再捕獲。
 - ・トラフグは広域で瀬戸内海を移動することから、放流を実施している瀬戸内海の各府県と連携し、放流個体の情報収集を実施している。岡山県や広島県での再捕獲の情報あり。

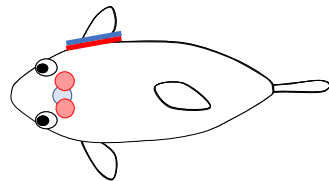


図4 トラフグの標識(有機酸、ひれカット)



図5 トラフグ釣獲情報提供依頼ポスター

5 メバル



(経緯)・令和4年度の第8次計画より、技術開発魚種に位置づけ、放流効果の検証を開始。

- ・スパゲティタグで標識した個体約1万尾を、岬町の増殖場周辺に放流。
- ・現在の大阪府内での漁獲量は推定で5～10トン程度。

(効果)・放流後の移動、成長の把握のため、随時漁獲物調査を実施していく。



図6 標識を装着したメバル

**標識がついた
メバルを探しています！**

大阪環水研水産技術センターでは、2022年より標識をつけたメバルを放流し、移動や成長についての調査を行っています。背中に標識がついたメバルが獲れたらご報告をお願いします。放流した年度や場所によって標識の色が異なります。

【ご報告いただきたい事項】

●採捕日 ●採捕場所 ●標識の色 ●大きさ

【お問い合わせ先】
地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所
水産技術センター 担当：木村・辻村
〒599-0311 大阪府泉南郡岬町多奈川谷川2926-1
TEL:072-495-5252 / FAX:072-495-5600
E-mail:houryu@o-suishi.in.arena.ne.jp

メールはこちら

図7 メバル再捕獲情報提供依頼ポスター